地域における育児支援サービスのあり方について
― 保育所の場合 ―

大 泉 哲 子[1)]，藤 原 由美子[1)]

要約：出生率低下の一つの要因として、育児にかかわる不安や負担が取り上げられている中、「子どもを健やかに生み育む環境づくり」として、地域ぐるみの育児支援サービスが求められている。

それに対応するためには、地域で核となってコーディネートする所（人）が必要である。そこで最も身近な児童福祉施設であり、また育児についての専門的な技術を蓄積している保育所（保母）に着目した。保育所における育児支援はどうあれば良いか、そして何ができるだろうか。

地域の親子や中学生、高校生にも目を向けた取り組みをしている保育所の実践例を通し、①親性を育てる、②若い親の育児不安を解消する、③心豊かな子どもを育てる、という三つの課題に向けて、育児支援のあり方について検討した。

見出語：親性、育児不安、心豊かな子ども

研究方法：児童福祉課内に高校教師、保健婦等の参加を得て研究委員会を設け、秋田県内にある２４４ケ所の保育所の中から、それぞれの課題に先駆的に取り組んでいる保育所を取り上げ、その状況を視察するとともに、保育所職員や関係者と意見交換する中からその方策について検討した。

結果：１）親性を育てる取り組み－中学生・高校生の保育体験－

中学生の保育体験については昨年度、若美町立中央保育園の「一日保父・保母活動」を報告しているので、今年度は高校生の保育体験を取り上げた。

本荘市にある県立由利高等学校（女子）と私立内越保育園との交流は、８年前から行われている。始まりは家政科生徒の年１回の保育実習であったが、形式的で深まらないという反省から、３年前から全校生徒が交流できるよう、そして保育園にとっても行事と関連づけやすいよう、年間計画を立てて実施している。

視察したのは平成３年度の３回目の交流「ふ

[1)] 秋田県福祉保健部児童福祉課：Akita Department of Welfare & Health Childrens Welfare Division

れあい遠足」の日であった。晴天のもと、３４名の高校生と１０２名の園児の３時間に及ぶ交流は終始和気あいあいとし、互いに名前を呼び合うなど、日常的な交流ですでに顔見知りになっている様子がうかがわれた。

高校生がどんな心構えで臨んだか。

◎ 笑顔を絶やさないようにした。
◎ 目の高さを同じくするためしゃがんだ。
◎ 自立心を尊重した。
◎ 特定の子だけでなくみんなに話しかけた。
◎ 危険な所に行かないよう気をつけた。
◎ 名前を早く覚えるようにした。

そしてみんな「子どもが好き、将来生み育てていきたい」と言っている。

回を重ねた保育体験を通して、子どもにどう対応するといいのか、子どもってこういうものなんだということを僅かずつ身に付けていることが感じられる。

２）若い親の育児不安を解消する取り組み－子育ての仲間づくり－

秋田市にある私立こばと保育園では、若い母親の孤独な子育てをなくし、育児不安や精神的な負担を解消する目的で、園庭・園舎を開放した「ほいくのつどい」を開いている。月２回、自由な形で日常の保育への参加を呼び掛け、母親同士の友達づくり、子育ての輪づくりのコーディネーターの役割を積極的に担っている。

平成３年１０月９日に視察。２５組の親子が参加している中で、初めての親子が１０組いた。親子共々友だちを求めてきている。母親たちは自分の子どもが、家ではやらない片付けなどを他の子につられるようにするのを目の当りにして、子ども同士の影響力の大きさを感じていたようだ。また同年齢の他の子を見ることで、母親の子ども観が軌道修正されたり、なにげない雑談の中で育児についての情報を交換して、日ごろの不安を解消するとともに、“おしゃべり”ができたことに満足している様子がうかがわれた。

３）心豊かな子どもを育てる取り組み－読み聞かせ３０運動－

秋田県では、人格形成の土台を作る幼児期に、心のひだに満ち足りた思いを刻むことを願って、「～声で　こころ　なでて　～　読み聞かせ３０（サンマル）運動」を推進している。サンマルとは一日のうち３０分でも、絵本を仲立ちとして子どもにだけ目と心を向けてほしい、という気持ちで名付けられた。

協和町立船岡保育園が３年前にこの運動に取り組んだ動機は、仕事と育児と家事の間に揺れる母親、そしてその間にこぼれる子どもを見兼ねてのことであった。何とかして親子のふれあいの時間を持たせたい、ひととき子どもだけを見つめて欲しいと願って実施された。

日常の保育の中で読み聞かせをすることに加え、絵本を厳選して揃え貸し出しを行っている。簡単な記録用紙に子どもの反応等を書いて、絵本と一緒に返してもらうという活動を続け、年度末には活動記録集「おおきい木」を発行している。

読み聞かせを始めてから子どもにどういう変化があったか。保育園が行ったアンケート調査によると５９人中４０人（６８％）の母親が子どもの変化を認めている。

◎ 自分から読んでとせがむようになった。
◎ 親子の会話がはずむようになった。
◎ ことばが豊富になってきた。
◎ 物語の世界の不思議さを感じている。

◎ じっと聞いていることができるようになった。
◎ 思ったことを自分から話すようになった。
◎ 絵や文字に関心を持つようになった。

（「おおきい木」第三集より）

また読み手である母親は「子どもに絵本を読んでいるうちに、心が和み、ゆとりが出てきて優しくなれる」と言っている。絵本には多忙な母親の心身の疲れを吸い取る魅力もあるようだ。

考察：1）親性は男女ともに生まれながらにして身についているものではなく、愛されて育った体験、異年齢児との集団遊び、お年寄りとのふれあい等の体験を通して培われるものと考えられている。いま地域社会からそういった体験をする機会が失われていることを考えると、内越保育園が実践している高校生との計画的で継続的な交流は、親性を育てる意味で極めて意義のある取り組みと言えよう。

2）育児不安は、親になり切れない親が孤独な子育てをしている時に強くなる傾向にあると考えられる。不安が強まると母親のストレスとなり、児童の折檻、虐待等を生む土壌となりかねない。

おおかたの育児不安は母親自身が問題として意識していないことが多い。大袈裟な「支援」は母親たちに受け入れられ難いものがあろう。そういった意味で、母親の意志で自由に参加できる場所があり、そこに参加することで母親自身が持っている治癒力が引き出されていくということは貴重なことである。

こばと保育園の無理のないさりげない態度は、母親たちに気安さを与え、口コミでその輪がどんどん広がっている。

3）働いている母親たちの育児不安にはまた別のものがある。「こんな育て方でちゃんと育つのだろうか」ということばに代表されているように、忙しさから子どもに十分に手を掛けられないでいる自責の思いからくる不安と言えよう。これもまた他人がことばで「助言」や「支援」をできる類いのものではないだろう。

結果のところでみた母親のことばにあるように、読み聞かせの持つ不安を癒すクッションの役目を再認識して、保育所の個性に合わせた読み聞かせ３０運動への取り組みが期待される。

4）取り上げた三つの取り組みの対象は、中・高校生、家庭保育の親子、保育所保育の親子と異なっている。いずれも即座に目に見えた効果となって現れるものではないし、またすべての対象者に適するとも限らない。しかしながら、保育所の特質を生かし、日常の保育活動と関連づけながら無理なく地域の育児を支援していく方法としては、有効なものと言えよう。

検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

要約:出生率低下の一つの要因として、育児にかかわる不安や負担が取り上げられている中、「子どもを健やかに生み育む環境づくり」として、地域ぐるみの育児支援サービスが求められている。
それに対応するためには、地域で核となってコーディネートする所(人)が必要である。そこで最も身近な児童福祉施設であり、また育児についての専門的な技術を蓄積している保育所(保母)に着目した。保育所における育児支援はどうあれば良いか、そして何ができるだろうか。地域の親子や中学生、高校生にも目を向けた取り組みをしている保育所の実践例を通し、①親性を育てる、②若い親の育児不安を解消する、③心豊かな子どもを育てる、という三つの課題に向けて、育児支援のあり方について検討した。